

平成30年6月21日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03897

研究課題名(和文)近代日本における「治者の教養」の再構築過程の歴史社会学的分析

研究課題名(英文) Historical sociological analysis of the reconstruction process of "self-education of the leader" in modern Japan

研究代表者

竹内 洋 (Takeuchi, Yo)

関西大学・東西学術研究所・客員研究員

研究者番号：70067677

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近代化過程で「治者の教養」がどのように再構築されてきたのか。この問いに対して、次の2つのアプローチを採用した。(1) 治者の教養を、思想的に掘り下げて探究した教養派知識人の代表格である阿部次郎を、同時代の社会状況やエリート文化とあわせて分析した。(2) 治者の教養を、統治のテクノロジーという観点から検討した。前者が読書や師の人格を通じて身につける教養であり、その教養を求める同志の關係に着目したのに対して、後者は自己や身体や組織のパフォーマンスを向上させる技術や制度に着目した。

研究成果の概要(英文)：How was "self-education of the leader" reconstructed in the process of modernization? To answer this question, we adopted the following two approaches. (1) Analyzing Jiro Abe's cultural theory while relating it to the social situation and elite culture of the same era. He is a representative of cultural intellectuals who inquired deeply through "self-education of the leader". (2) We examined "self-education of the leader" from the viewpoint of technology for governance. The former education emphasizes importance of reading classics, personality exchanges with masters, and community of comrades. On the other hand, the latter focuses on technologies and institutions that improve the performance of self, body and organization.

研究分野：教育社会学、歴史社会学

キーワード：教養 教養主義 治者 統治のテクノロジー

1. 研究開始当初の背景

道徳や教養を[宛先]と[段階]の2軸を用いて左図のように4つの類型に整理すると、[一般向け×学校段階]は修身/道徳教育、[指導者向け×学校段階]は哲学教育や教養主義、[一般向け×社会人段階]は修養主義や自己啓発、そして[指導者向け×社会人段階]が本研究の対象である「治者の教養」があてはまる。

	一般向け	指導者向け
学校教育 学生文化	I 修身教育 道徳教育	II 教養主義
自己教育 生涯学習	III 修養主義 自己啓発	IV (治者の教養)

戦前の旧制高校的な教養主義( )は、西洋の人文社会系の書物を通じて人格を向上させるものであり、小学校で学ぶ修身教育( )から隔絶していたが、帝国大学以降は実学志向が高まり通俗的な自己啓発書( )とも折り合いをつけていった(竹内洋『立身出世主義』NHK出版,1997)。第 類型は教育学・教育史を中心に、第 類型は社会学・社会思想史を中心に研究されてきた。とくに研究代表者・竹内洋の『教養主義の没落』(2003)、研究分担者・牧野智和の『自己啓発の時代』(2012)は と の各類型の定説を形作る成果とあってよい。また日本型教養主義が大衆的な修養主義を基盤に成立したこと(筒井清忠『日本型「教養」の運命』1995)、教育機会の拡大により戦後の一時期まで教養への大衆的憧憬が強まったこと(竹内前掲書)などから、 と を隔てる壁の脆弱さが強調されてきたこともあり、第 類型はせいぜい教養主義の大人版( の保存)か幹部サラリーマン向けの成功哲学( の上昇)といった位置づけにとどまった。他方、研究分担者・井上義和の『日本主義と東京大学』(2008)は、戦時体制下の保守主義的到達を発掘するなかで、国体論には「被治者を支配する技術」と「治者の自己拘束の倫理」という2つの系譜を峻別して、後者の系譜が戦後忘却されてきた問題を指摘した。これが第 類型の「治者の教養」の不在という問題意識につながる。それは、個別具体的な思想的・教育的営為としては実践されてきたにしても、もともと制度的裏付けも文化的基盤も弱く、さらに戦後は「治者」を名指すことの規範的な制約も強まり、研究上も対象化されにくかったということである。もちろん、これまでも個別的思想家や実践家の思想的研究、企業経営者のエートスの探究を試みる研究(筒井前掲書)はあった。しかし、その思想的・教育的営為をより大きな社会的文脈の上に位置づけ、近代日本/戦後日本の「治者の教養」のあり方を問い直す歴史社会学的研究は、これからであ

る。

最近の研究状況としては、研究代表者の竹内洋は、2009~11年度基盤研究(B)「戦後日本における公共圏としての論壇に関するメディア史的研究」および2012~2014年度基盤研究(B)「日本型公共知識人の成立と変容」の共同研究を指揮し、論壇的公共圏という場の生成と変容を通してメディア知識人の生態を分析したうえで、あらためて教養主義の問題に回帰してきた。手がかりのひとつは、大正教養主義の始祖とみられた『三太郎の日記』の著者・阿部次郎の教養論の根幹にあった人格主義の再評価である(竹内洋「身を修む」教養を根幹に据えよ」『産経新聞』2014/10/6)。

2. 研究の目的

「治者と被治者の自同性」を旨とする民主主義社会では、道徳や教養の宛先も治者と被治者で区別されることはないが、広義の治者には固有の教養が要請される。本研究はこの課題に近代日本がどう取り組んできたのかを2つの分析枠組みによって解明する。第1に、治者の身分(武士)が解体され世代交代が進んだ大正期以降に試みられた「治者の教養」の再構築と伝承の過程である。正規の教育課程にも学生文化にも位置づけられず、個別の思想的・教育的営為としておこなわれた系譜を跡付ける。第2に、学生時代には学べない「治者の教養」を政官財界の指導層がどのように身につけ、また身の振り方に活かしているのか、「治者の教養」の修得と再解釈の過程である。それをふまえ「教養主義の没落」とは別の水準で起こった戦後の変容の内実を分析する。

3. 研究の方法

- (1)大正・昭和前期に旧制高校を中心に影響力をもった知識人の代表格として阿部次郎を取り上げ、彼がどのように教養派知識人になっていくのかを同時代の社会状況やエリート文化とあわせて分析する。読書や師の人格を通じて身につける教養や、その教養を求める同志の関係に着目する。
- (2)現代の経営者層にとって太平洋戦争末期の特攻の物語がもつ教養的機能について調査、分析をおこなう。旧陸軍特攻基地・知覧での経営者幹部研修への参与観察や主催団体への聞き取りもおこなう。
- (3)治者の教養を、統治のテクノロジーという観点から検討した。自己や身体や組織のパフォーマンスを向上させる技術や制度に着目する。

4. 研究成果

- (1)治者の教養を、思想的に掘り下げて探究した教養派知識人の代表格である阿部次郎を、同時代の社会状況やエリート文化とあわせて分析した。その成果は、竹内洋「教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代」として

前年から『ちくま』に連載が開始され、平成27年12月号の第15回をもって一応の完結をみた。これは現在、図書にまとめる作業をおこなっている。

それを補完する作業として、メリトクラシー社会における治者の困難と成立条件を考察したのが、井上義和「解説 治者と選良 保守的転回の転軸機」(竹内洋『日本のメリトクラシー 増補版』東京大学出版会、2016年所収)である。そこでは、治者を支える権威がなくなった時代に治者という「不幸な役割」を引き受けることの困難、という江藤淳(『成熟と喪失』1967)の問題意識を参照しながら、メリトクラシーが生み出す選良と、社会統治の必要が要請する治者との不一致の問題を取り上げた。

また、補完作業の2つ目として、井上義和「雄弁青年と右翼学生 順応と逸脱の逆説から考える」(大学史研究セミナー、2017年、シンポジウム「近代日本の学校システムによる学生の包摂と排除」での招待講演)がある。メリトクラシーによる選抜社会ゆえの、身分文化の「穴」を意識高いエリート学生がどう埋めるか、という問題について、雄弁青年と右傾学生の例を中心に説明を試みた。どちらも、学校システムのなかに正統な居場所を獲得しながら、いつのまにか衰退(雄弁青年)/逸脱(右傾学生)してしまった。過剰さをはらむ学生を中庸(moderation)に導く機能が、本来エリート養成機関には必要なはずで、治者の身分文化というものを、そうした観点から再評価すべきであると提案している。

(2)特攻の物語がもつ教養的機能の研究に関する成果としては、井上義和「記憶の継承から遺志の継承へ 知覧巡礼の活入れ効果に着目して」(福岡良明・山口誠編『「知覧」の誕生』柏書房、2015年)、「戦死とどう向き合うか? 自衛隊のリアルと特攻の社会的受容から考える」(好井裕明・関礼子編『戦争社会学』明石書店、2016年)、「感謝の発露と美化批判 ポスト戦後七〇年の対立軸」(『戦争社会学研究』1号、2017年)などがある。

(3)治者の教養を、統治のテクノロジーという観点から検討した成果としては、牧野智和「「自己」のハイブリッドな構成について考える:アクターネットワーク理論と統治性研究を手がかりに」(『ソシオロゴス』41号、2017年)、「自己・再帰性・異種混交性:手帳術本の再分析を中心に」(『表象』11号、2017年)、「オフィスにおけるフローの諸統治」(『現代思想』46(5)、2018年)などがある。

また、それを補完する作業として、井上義和「参加型パラダイムは民主化の夢を代替するか? ポスト代表制の学生自治」(藤本夕衣・古川雄嗣・渡邊浩一編、反「大学改革」論)ナカニシヤ出版、2017年)では学内統治の仕組みにおける代表(representation)から促進(facilitation)へのパラダイム転換

を論じ、同「知の変容とアカデミズム 講座制・教養部・師弟関係」(日本教育社会学会編、稲垣 恭子・内田 良責任編集『教育社会学のフロンティア2 変容する社会と教育のゆくえ』岩波書店、2018年)では高等教育システムの昭和的な二極構造のなかで生まれたアカデミズムと知の緊張関係について、師弟関係を補助線に論じている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

牧野 智和、オフィスにおけるフローの諸統治、現代思想、査読無[招待] 46(5)、2018年、pp.171-182

井上 義和、感謝の発露と美化批判 ポスト戦後七〇年の対立軸、戦争社会学研究、査読無[招待] 1号、2017年、pp.34-50

竹内 洋、日本型選抜の狡知と帰趨:『日本のメリトクラシー』増補版刊行にあたって、UP、査読無[招待] 46(3)、2017年、pp.1-5

牧野 智和、「自己」のハイブリッドな構成について考える:アクターネットワーク理論と統治性研究を手がかりに、ソシオロゴス、査読有、41、2017年、pp.36-57

牧野 智和、身体をめぐる大衆的想像力の現在:「パーツ」への着目、スポーツとビジネスの節合、スポーツ社会学研究、査読無[招待] 25(2)、2017年、pp.21-37

牧野 智和、自己・再帰性・異種混交性:手帳術本の再分析を中心に、表象、査読無[招待] 11、2017年、pp.65-72

牧野 智和、「カーネギー」本が愛される理由、PRESIDENT、査読無[招待] 54(32)、2016年、pp.34-35

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 15、ちくま、査読無[招待] 537号、2015年、pp.38-43

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 14、ちくま、査読無[招待] 536号、2015年、pp.38-43

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 13、ちくま、査読無[招待] 535号、2015年、pp.38-43

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 12、ちくま、査読無[招待] 534号、2015年、pp.42-47

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 11、ちくま、査読無 [招待] 533号、2015年、pp.40-45

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 10、ちくま、査読無 [招待] 532号、2015年、pp.42-47

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 9、ちくま、査読無 [招待] 531号、2015年、pp.36-42

竹内 洋、教養派知識人の運命 阿部次郎とその時代 8、ちくま、査読無 [招待] 530号、2015年、pp.30-35

〔学会発表〕(計2件)

井上 義和、雄弁青年と右翼学生 順応と逸脱の逆説から考える、大学史研究セミナー、[招待] 2017年11月

井上 義和、感謝の発露と美化批判、戦争社会学研究会、[招待] 2016年4月

〔図書〕(計6件)

日本教育社会学会編、稲垣 恭子・内田良責任編集、教育社会学のフロンティア2 変容する社会と教育のゆくえ、岩波書店、2018年、全305頁(井上 義和、知の変容とアカデミズム 講座制・教養部・師弟関係、pp.75-97)

藤本 夕衣・古川 雄嗣・渡邊 浩一編、反「大学改革」論 若手からの問題提起、ナカニシヤ出版、2017年、全247頁(井上 義和、参加型パラダイムは民主化の夢を代替するか? ポスト代表制の学生自治、pp.97-116)

好井 裕明・関 礼子編、戦争社会学 理論・大衆社会・表象文化、明石書店、2016年、全243頁(井上 義和、戦死とどう向き合うか? 自衛隊のリアルと特攻の社会的受容から考える、pp.123-144)

竹内 洋、日本のメリトクラシー増補版、東京大学出版会、2016年、全325頁(井上 義和、解説 選良から治者へ 保守的転回の転轍機、pp.301-311)

竹内 洋、革新幻想の戦後史、上・下巻、中央公論新社、2015年、上巻369頁、下巻377頁(井上 義和、解説 「隠れ保守」の生き残り戦略、下巻 pp.333-341)

福間 良明・山口 誠編、「知覧」の誕生 特攻の記憶はいかに創られてきたのか、柏書房、2015年、全425頁(井上 義和、記憶

の継承から遺志の継承へ 知覧巡礼の活入れ効果に着目して、pp.357-411)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 洋 (TAKEUCHI, Yo)

関西大学・東西学術研究所・客員研究員

研究者番号：70067677

(2) 研究分担者

井上 義和 (INOUE, Yoshikazu)

帝京大学・学修・研究支援センター・准教授

研究者番号：10324592

(3) 牧野 智和 (MAKINO, Tomokazu)

大妻女子大学・人間関係学部・講師

研究者番号：00508244

(4) 連携研究者 なし

(5) 研究協力者 なし